

関西大学の DX 推進に向けて

インフォメーションテクノロジーセンター副所長
社会安全学部准教授 河野 和 宏

関西大学では2021年、①学修機会のあらゆる制約の軽減・除去、②学修成果の可視化、③DX 推進のためのインフラ・環境整備、④学内業務の効率化、の4点を柱にした関西大学DX 推進構想を立ち上げ、これまでの本学の教育や学習、研究の手段や環境を変革させている最中である。その一環として、2024年4月から、学術情報事務局に業務DX 推進グループが設置された。本グループは、学内業務のデジタル化推進と効率化を図り、業務DX 推進計画の策定と見直しを担う部署となっており、これまで以上に関西大学でDX が推進されることが期待されている。

さて、本号にご寄稿いただいた2篇は、どちらも大学のDX 推進に関係する内容となっている。石崎氏と小尻先生の「学習スタイル把握のためのノートツールの構築」では、学習者の思考過程を表出化するノートツールを提案しており、「学修成果の可視化」に貢献する内容となっている。同じ学習内容であっても、理解・習得に至るまでの思考過程は個人ごとに異なる。教育者（指導者）にとって個人ごとの特性・学習スタイルを把握することは学習指導において極めて有用であり、一教員としても、学生の思考を紐解く際に本研究の考え方や内容を参考にしたいと思う。

また、友枝先生が取りまとめられた「高槻キャンパス XD キャンパス構想」では、DX の先を見据えた高槻キャンパスの取り組みが座談会形式で紹介されている。1キャンパス1学部である特性を生かしたキャンパス全体が一つの大きな教育施設・研究施設とみなした大きな構想をはじめ、キャンパス内でデータを生み出す・貯める・分析することの重要性とそうした価値あるデータにするための文理にとらわれない教養教育の必要性、学生を巻き込んだ研究活動を実現するための取り組みや学生の学習機会・雇用機会の創出など、多種多様な観点から議論されている。これらの多くの示唆に富む内容は、DX を通じて学部の枠を越えよりよいキャンパス・大学と変革していくための大きな糸口になるだろう。

こうしたDX に関する話題を拝見していると、近年ではSociety 5.0という言葉で言われているが、2000年代後半に言われていたアンビエント社会が到来しつつあることを実感し、感慨深いものがある。当時大学院生だった筆者は、「いつでも、どこでも、誰でも」つながる

ユビキタス社会から「いまだから、ここだから、あなただから」をコンセプトとしたアンビエント社会へと移行するという話を講義内で聞いた際、漠然としたイメージしか描けなかった。それが今や、「XD」の意味の一つとしてあげられたクロスサムシングやクロスディシプリン（分野融合）は、アンビエント社会を拓くために必須のものとして考えられている。また、「あなただから」をまさに実現した AI を用いた適応学習（アダプティブ学習）のサービスが学習塾中心に提供されており、大学教育でも積極的に活用していくべき段階に入っている。

IT センターとしても、2021年にまとめた IT センターランドデザイン「5年後のあるべき姿」に沿ってサービスや環境を改善し続けている。BYOD 化やそれに伴う KU Wi-Fi も含めた各種ネットワークやインフラの整備・強化、クラウドサービスの利用促進、各種 ICT ツールを活用した業務効率化、CSIRT の構築とセキュリティの強化などが行われている。これからも、この高度情報化社会の中で、関西大学に関係する誰もが取り残されず、一人一人がそれぞれの立場で快適に暮らしていくために、DX の一層の推進、サービスの充実に努めていく所存である。今後も引き続き IT センターにご協力をお願い申し上げる次第である。